

育成すべき資質・能力を育む学びの在り方に関する研究 〔最終報告〕

— 「見方・考え方」を働かせた「深い学び」の実現を目指した高等学校における授業実践 —

宮本利香¹ 中根賢¹ 石井晴絵²

変化の激しい時代を生きる子どもたちに必要な資質・能力を育むために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。本研究は、各教科等の「見方・考え方」を働かせた「深い学び」に着目し、県立高等学校で三つの授業実践を行い、「深い学び」を実現する授業のイメージを示すことができた。研究成果をまとめ、発信することにより、高等学校における授業改善の推進に資することを旨とする。

はじめに

平成28年12月に中央教育審議会が取りまとめた、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(以下、「答申」という)には、2030年の社会と子どもたちの未来について記されている。社会の変化は凄まじく、人工知能の発達等により、複雑で予測困難な時代になることが予想されている。未来を生きる子どもたちが、よりよい社会の創り手となるために、どのような資質・能力を育成すべきか、学校だけでなく地域社会と共に考え、育んでいくことが大切であり、「社会に開かれた教育課程」として、学校と社会が連携することが求められている。

さらに、「答申」では、育成を目指す資質・能力の三つの柱を、①「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得) ②「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成) ③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」と示している。その資質・能力を育むために、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善が重要であると言われている。主体的な学び、対話的な学び、深い学びは相互に影響し合うものであるが、「深い学び」や、それに関わる「見方・考え方」については、学校現場において、イメージがつかみにくいという考えを持つ教員が多い。そこで本研究は、各教科の「見方・考え方」を働かせた「深い学び」に着目した授業実践例を提示する。

本稿は、平成28・29年度の二年間にわたる研究の取組と成果をまとめた最終報告である。

研究の目的

これからの時代を生きる子どもたちに求められる資質・能力を育むため、「主体的・対話的で深い学び」の授業改善が求められている。このうち、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせた「深い学び」を実現するための指導と評価について整理し、調査研究協力員三名の教諭(以下、「協力員」という)による授業実践を通して検証する。実践事例の収集・分析等を中心に研究をまとめ、発信することにより高等学校における授業改善推進に資する。

研究の内容

1 研究の概要

(1) 平成28年度の取組と研究の成果

ア 平成28年度の取組

「主体的・対話的で深い学び」の「深い学び」に着目し、どのように授業が改善され、その結果、生徒のどのような変容につながったかを示す、協力員による実践事例を収集した。

イ 平成28年度の研究の成果

「深い学び」をイメージし、授業を構想したところ、「主体的な学び」と「対話的な学び」がおのずと取り入れられ、単元で身に付けさせたい力を育成することができた。

また、「深い学び」を実現するために効果的だった学習過程・指導の工夫を、次の五つにまとめた。

- ・主体的に学ばせる
- ・生徒同士の対話を取り入れる
- ・考えを可視化して交流する
- ・能動的に聞く力を育成する
- ・安心、安全な学習環境を設定する

以上が、平成28年度の研究の成果である。このことを踏まえて、平成29年度も研究を進めた。

1 教育課題研究課 指導主事

2 教育課題研究課 主幹(兼)指導主事

(2) 平成 29 年度の取組

「深い学び」の実現に向けた、学びの「深まり」の鍵となるのは、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」である。「深い学び」の実現に向けた授業イメージを明確に伝えるために、平成 29 年度は、この「見方・考え方」を働かせた授業実践について研究する。

2 各教科等の特質に応じた「見方・考え方」の整理

「答申」には、各教科等における習得・活用・探究という学びの過程において、各教科等で習得した概念(知識)を活用したり、身に付けた思考力を発揮させたりしながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりするという学びを通じて、資質・能力が伸ばされたり、育まれたりしていくと記されている。その過程において、教科等ごとの特質に応じた、物事を捉える視点や考え方が鍛えられていく。これが「見方・考え方」であり、各教科等の学習の中で働かせるだけでなく、生涯にわたって生活する上でも重要な働きをするものである。

今年度、授業実践を行った家庭科、外国語科の特質に応じた「見方・考え方」のイメージを、「答申」より、以下に示す(中央教育審議会 2016 別紙 1)。

生活の営みに係る見方・考え方	家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること。
外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方	外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること。

3 協力員による授業実践の方向性

本研究を進めるに当たり、県立高等学校三校に協力を依頼し、各校の教諭一名を協力員として委嘱した。調査研究協力員会(以下、「協力員会」という)第一回を平成 29 年 7 月に開催した。「深い学び」を実現する授業について協議し、次のような意見が出された。

- ・生徒が進んで学びたいような学習内容にする。
- ・生徒が学習を経て、達成感や充実感を得るようにする。
- ・学習を通して身に付けた「見方・考え方」が、生徒の日常生活に役立つようにする。

これらに基づいて、授業をどのようにデザインしたらよいかを検討し、「深い学び」を実現するための事前整理として、平成 28 年度の取組と同様に単元観、生徒観、指導観を第 1 表のようにまとめた。

第 1 表 「深い学び」を実現するための事前整理

ア 単元観	【本単元の特徴】本単元のどのような学習内容が、生徒たちに求められている資質・能力の育成につながると捉えているか。
イ 生徒観	【生徒の学力や学習状況の実態】これまでの学習で身に付けている力と、本単元で身に付けさせたい力とは何か。
ウ 指導観	【深い学びのイメージ】本単元を生徒が深く学ぶということを、どのようにイメージして学習過程や指導を工夫したか。

協力員は家庭科一名、外国語科(英語)二名で、各自が教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせた「深い学び」を意識した授業を構想した。

8 月の第二回協力員会で、授業実践をする際の学習指導案を用いた事前検討を行い、9 月に各校で構想に基づく授業を実施した。また 10 月の第三回協力員会において、授業実践の振り返りを行った。

4 授業実践 1 (家庭・家庭基礎)

(1) 「見方・考え方」を働かせた「深い学び」

健康・快適・安全な住環境について考え、適切な住居の計画や選択ができるようにする。さらに、自らの住環境を見直し、家族や地域の人々の安全に配慮できる視点を持ち、実生活でもいかせるように工夫する。

(2) 授業実践の概要

- 対象生徒 1 学年 1 クラス 40 名
- 教科・科目 家庭・家庭基礎
- 単元名 住生活をつくる

(3) 「深い学び」を実現するための事前整理

ア 単元観

本単元において、健康・快適な住環境を考えるだけでなく、防災の視点からも安全で安心できる住環境づくりを考えることで、実生活においても、健康・快適・安全な住環境の充実・向上を図ることができる。

イ 生徒観

これまでの授業でもペアワーク等により、コミュニケーション能力を身に付けているが、発言したり、意見交換をしたりすることが苦手な生徒も多い。本単元を通して、自分の考えを表現し、相手に伝えることで、再度自分の考えを見つめ直し考えを深めていく。

ウ 指導観

自分で製作した作品を他者と比較し、ペアワークにおいて相手に説明させることで、自分の考えを再度整理させ、気付きを促す。また、地震時の映像を見せ、生徒自身に必要な防災対策を考えさせることで、安全に住まうことを意識し、対応する力を身に付けさせる。

(4) 学習指導案の概略

ア 単元で身に付けさせたい力

健康・快適・安全な住環境について考えを深め、実

生活の充実・向上を図ることができる。特に、防災の視点を持ち、災害が身近に起こるものと意識した備えを、心掛けられるようにする。

イ 単元の評価規準

関心・意欲・態度(a)	健康・快適・安全な住居や住環境について考えようとしている。
思考・判断・表現(b)	健康・快適・安全な住居について考えを深めることができ、まとめたことを表現することができる。
技能(c)	健康・快適・安全に配慮した室内整備や住環境について、情報を収集、整理し、活用することができる。
知識・理解(d)	住居の機能、住空間の計画、健康で快適な住居について理解している。安全に配慮した住環境や課題を認識し、対応する力を身に付けている。

ウ 単元の指導と評価の計画

時	学習内容 学習活動	指導上の留意点	評価の観点			
			a	b	c	d
1 2	住居の機能や気候風土による違いを話し合う。 空間の成り立ちについて学ぶ。 持続可能な住環境を考える。 健康に配慮した快適な室内環境に関する基礎知識を学ぶ。	気候風土による違いを、資料を用いて地理的条件等をヒントに考えを促す。 空間や住環境の役割等を、実生活を振り返りながら考えさせる。		○		○
3	平面図の見方を理解する。間取りを比較し、違いを考える。 【宿題】理想の一人暮らしに必要な「インテリアスクラップブック」を製作する。	ライフステージに応じて住居の機能等に相違があることを考えさせる。 【宿題】目的を理解させ、指示を明確に行う。			○	○
4 5	「インテリアスクラップブック」を用いてペアで比較・確認し合う。 地震の映像を見て防災対策を考える。 水・ガスを使わず(洗い物を出さない)防災食の実習を行い、災害時の備えを考える。	ペアでお互いにプレゼンテーションをし、質問をし合うことで、お互いに考えを深めさせる。 スクラップブックに足りない防災対策を考えさせる。 防災に関して、食の面からの備えを考えさせる。	○	○		

(5) どのように学ぶか(学習過程・指導)の工夫

学校の地域性や立地環境により、学校全体で防災教育に力を入れている。家庭科という教科を通して、住居の安全を学習する際、防災の視点を単元計画に取り入れた。

単元の学習過程は、単元の前半で健康・快適な住居について理解した上で、インテリアスクラップブック(第1図)を製作し、後半ではそれを用いてペアで、更に快適・安全な住居について考えるという構成になっている。単元の後半で考える際に、生徒同士が互いの作品を見て指摘し合う学習活動にしていること、また、地震時の映像を見せることによって、防災の視点を取り入れる必要があることに気づき、振り返らせることが、本実践の特徴的な工夫である。

まず、クラス全体で、各自が製作したインテリアスクラップブック(自分が理想とする一人暮らしに必要な



第1図 インテリアスクラップブック

な家具や家電をコラージュし、部屋のコンセプトや選んだ理由、価格等をまとめたもの)を見合う。次に、ペアになり、インテリアデザイナーになったつもりで、自分の作品をプレゼンテーションし、互いの作品について、選んだ理由や足りないものについて話し合う。生徒たちは自分の作品に基づき、他者と意見交換をすることにより、自分たちで快適な住居について考えを深めていく。

さらに、安全面については、授業者が説明するのではなく、地震時の映像を提示することで、生徒たちは自分たちのインテリアスクラップブックに地震対策が抜けていたことに気づき、問題点を見つけ、改善策について考えた。

(6) 何ができるようになるか(資質・能力の育成)の検証

健康・快適・安全な住環境について考えを深めたことは、インテリアスクラップブックを用いた学習活動や、それに関わるワークシートの記述により、見取ることができた。特に、安全面についても多くの生徒に防災を意識した記述があり、生徒自身が製作したインテリアスクラップブックの問題点を見いだして、改善策を検討できていた。これは「深い学び」の具体的な内容にある「問題を見いだして解決策を考えた」(中央教育審議会 2016 p. 50)ことにつながる。また、インテリアスクラップブックにとどまらず、実生活の地震対策を見直し、家族や地域住民の安全にも配慮する記述が、授業の振り返りの際に見られた。

授業実践の最後に、授業の振り返りを兼ねて、生徒にアンケートを実施した。「現在または将来の自分の生活について問題を見つけて、解決策を考えながら深く学ぶことができた」の問いへの回答は、4件法で、当てはまるが71.8%、やや当てはまるが25.3%であった。多くの生徒が生活の課題を見だし、実生活の充

実向上を意識しているのが分かる。

○生徒の記述から(抜粋)

- ・一人暮らしをするときは、物件の周辺やかかわりを持つところを調べて、災害時の準備をすることが必要で、いかそうと思った。
- ・デザインや値段の問題もあるけど、やっぱり一番大切なのは防災の意識を持つことだと思った。まずは今、住んでいる家を見直したい。ベッドで寝ていた時に物が落下してこないか、自分が安全な環境で暮らしているかを確認したい。
- ・災害にあった時、自分の家を守るの自分しかいない。大切な家を守るためにも、今日学んだ防災の事を伝え、実行していこうと思いました。自分だけではなく、家や家族を守るために。
- ・災害について対策するのは当然のことだし、家族を守るために伝えたいと思う。大切な住まいに関する事を考えられていなかった。自分だけでなく、他の人を守るようになりたいと思えました。

5 授業実践2(外国語・コミュニケーション英語Ⅱ)

(1) 「見方・考え方」を働かせた「深い学び」

革新者と言われるココ・シャネルについて書かれた英文を読み、既存の価値観に捉われず創造することについて、ペアワークにより考えを形成し、自分たちで考えた発明品を英語で表現する。

(2) 授業実践の内容

- 対象生徒 2学年 1クラス 40名
- 教科・科目 外国語・コミュニケーション英語Ⅱ
- 単元名 Lesson 4 Chanel's Style

(3) 「深い学び」を実現するための事前整理

ア 単元観

ココ・シャネルの「様々な知識を基に、既存の価値観に捉われない斬新な考えを形成し表現する」ことを学習する中で、得た知識を基にペアワークで協力しながら発明品を考え、英語で表現する。

イ 生徒観

英文の内容を基に、筆者の考えに対する自分の考えや意見を整理し、英語で表現することに取り組んできた。「既存の慣習や文化を多方面から見直し、問題を見つけて解決する」視点から、ペアでコミュニケーションを取りながら協力し、表現する力を伸ばす。

ウ 指導観

英文から読み取った内容を基に、自分の考えを持ち、ペアワークにより互いに学び合うことで、考えを形成したり、問題に対する解決策を見いだしたり、共有したりすることで、考えを深めていく。

(4) 学習指導案の概略

ア 単元において身に付けさせたい力

英文を理解した上で、自己表現活動を通して自分の

考えを形成・整理し、英語を活用する力。

ペアで協力し、考えた内容を英語で表現する力。

イ 単元の評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度(a)	ペアワークに意欲的に取り組んでいる。トピックについて関心を持ち、ペアで意見交換をしている。
外国語表現の能力(b)	各自が考えた内容をペアで共有し、その内容を英語で適切に伝えることができる。
外国語理解の能力(c)	英文を読み、設問に取り組みながら、概要を理解することができる。
言語や文化についての知識・理解(d)	イディオムや新出語句の意味を理解し、運用することができる。

ウ 単元の指導と評価の計画

時	学習内容 学習活動	指導上の留意点	評価の観点			
			a	b	c	d
1 5 6	Part 1～2 ・ペア活動 ・概要把握 ・文法理解	概要把握や文法理解はペアワークで取りまかせ定着を図る。一人が日本語、もう一人が英語に直す際、通訳するようにプロダクションさせる。英文の内容は簡単な英語にさせ、意見をシェアさせる。	○		○	○
7 5 12	Part 3～4 ・ペア活動 ・概要把握 ・文法理解 ・自己表現活動	ペアワークにより英文の内容を理解させる。自己表現活動では、ペアで発明品を考え、英語で表現させる。難しい表現は机間指導でヒントを与える。	○	○		○

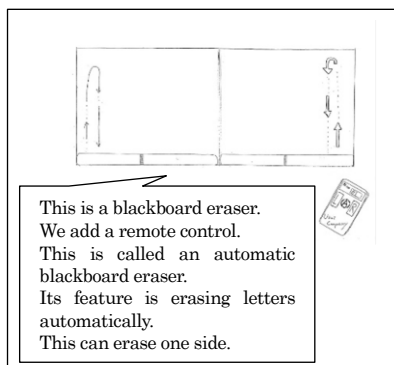
(5) どのように学ぶか(学習過程・指導)の工夫

英文を読み、ココ・シャネルが、自分の価値観に基づいて新たなものを創造し、既存の価値観に捉われていなかったことについて知る。その際、英文の要約や文法だけの学習内容にとどまらず、読んだことを踏まえて、新たな発明を考える自己表現活動を単元の後半に取り入れた。ペアワークを通して考えをより良いものにして英語で表現させることで、「深い学び」を実現することを目指した。

自己表現活動を取り入れた授業に限らず、帯活動でペアワークを取り入れている。一人が日本語を話し、もう一人が対応する英文を瞬時に答えるなど英文のイディオムの定着を図るものや、新出単語の復習、英文の読解などに取り組ませている。ペアワークで何をするのかを明確にし、タイムマネジメントを確実にしている。英文の読解に関して、分からない部分はペアで協力して学習に取り組ませたが、それでも分からない場合は、授業者が机間指導により対応した。

自己表現活動は、既存の物の問題点や不便なところ

を考え、それを補うために新しい物をペアで発明し、その発明品の紹介文を英語で書かせ、イラストとともに発表させるという活動である(第2図)。



第2図 自己表現活動の作品

発明品について英語で説明文

を書く場面では、生徒はどのように表現するかについて試行錯誤し、辞書を引いたり、「この前授業で習った、あの表現を使おう」と既習内容を活用したりする姿が見られた。説明文の表現が分からない生徒は、机間指導をしている授業者に質問をするが、授業者はヒントを出すのみで、生徒自身に考えさせた。

(6) 何ができるようになるか(資質・能力の育成)の検証

英文を理解した上で、既存の価値観に捉われない視点を持ち、自分の考えを形成・整理する力については、ペアで協力し、発表・提出した作品により、評価することができた。

ペアで協力し、考えた内容を英語で表現する力については、自己表現活動の取組の観察からは、アイデアを出し合うことに時間がかかった様子が見受けられたが、授業後のアンケートの「他者と協力して意見をまとめ、英語で表現できた」の問いへの回答は、4件法で当てはまるが59.5%、やや当てはまるが40.5%であり、身に付けさせることができたといえる。

自己表現活動について、ペアで協力することでより良いアイデアが生まれ、コミュニケーション活動を通じて積極的に授業に参加できたという感想が多く見られた。この自己表現活動は、テーマを変えて他の単元に取り入れることが可能である。

○生徒の記述から(抜粋)

- ・ペアワークで相手の意見を聞いたり、自分の意見を言ったりと、コミュニケーションをたくさんとって楽しかったし、相手は自分と違う考えを持っているので、おもしろいと思った。
- ・ペアでコミュニケーションを取ることで、お互いに分担して考えたり、お互いの意見を交換したりコミュニケーション能力を養うことができた。
- ・どうしたらその商品を詳しく英語で伝えられるかを工夫した。今回の授業で、視野を広げることが大切だと思った。
- ・共同で知恵や意見をシェアできる。アイデアを出したり、間違いを指摘したり、助言し合える。

6 授業実践3 (外国語・英語表現Ⅱ)

(1) 「見方・考え方」を働かせた「深い学び」

ペアワークによる対話を通して、英語意見文の構想を練る手法を学ぶ。知識や得た情報を活用して、自分の意見を形成し、対話を通して整理し、英語意見文の形式で再構築する力を育成する。作文テストで学びを総括し、英語意見文を書く際に、繰り返し活用できる手法を学ぶ。

(2) 授業実践の内容

- 対象生徒 2学年 1クラス 40名
- 教科・科目 外国語・英語表現Ⅱ
- 単元名 パラグラフを書く 比較・対照

(3) 「深い学び」を実現するための事前整理

ア 単元観

本単元では、都会と田舎を比較し、どちらの生活がより良いかについての主張を、論理的に100語程度の意見文として書くための手法を学ぶ。対話を通して、自分の主張を支持するための複数の視点を知り、他者の意見を聞くことで、より説得力のある意見文を書くことができる。

イ 生徒観

英語意見文の学習は、本単元で5単元目となり、生徒は英語意見文がどのようなものかおおむね理解している。都会と田舎を比較することをテーマに、英語意見文として、説得力のある主張を展開するための力を身に付ける。

ウ 指導観

他者と話す、相手の主張を図式化する、定型文に当てはめてみるなどの手法を体験的に学ばせることで、英語意見文を書くときに、いつでも活用できる手法を身に付けさせる。授業の始めに教員が手法を教え、中で生徒が練習し、終わりに生徒が学びを総括する。

(4) 学習指導案の概略

ア 単元で身に付けさせたい力

比較することを通して、相違点や類似点を検証し、英語意見文における自分の主張と論拠を挙げることができる力。

対話を通して自分の主張を相手に説明し、また、積極的な良い聞き手となるために質問することができ、相手の主張と論拠を図式化するなど、対話の内容を整理することができる力。

自分の主張と論拠を定型表現に当てはめ、英語意見文の構想を練る手法を獲得し、繰り返し活用することができる力。

イ 単元の評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度(a)	自分の主張を、より論理的に他者に伝えるというコミュニケーションの場面を理解し、積極的に言語活動を行っている。
------------------------	--

外国語表現の能力 (b)	事実や意見などを多様な視点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら、論理的で説得力のある英語意見文を書いている。
言語や文化についての知識・理解 (d)	英語意見文の構想を練る手法についての知識を身に付けている。

ウ 単元の指導と評価の計画

時	学習内容 学習活動	指導上の留意点	評価の観点		
			a	b	d
1	都会と田舎の生活の良いところを比較しペアで質問し合う。 【宿題】英語意見文を書くための、自分の主張と論拠を挙げる。	主張を展開する際の複数の視点を知らせる。 対話を通し、アイデアを出させ、英語意見文の構想を練らせる。			○
2	対話によりペアで主張と論拠を質問し合い、相手の主張と論拠を図式化する。 定型表現に自分の主張と論拠を当てはめて言い、その論理性を検証する。英語意見文を書く。 【宿題】英語意見文を書いて提出し、返却された英語意見文を、チェックリストを使い校正する。	ALTとのデモンストレーションを見せ、対話のイメージを与える。 定型表現が間違っていないか、机間指導をしながら注意を払う。 論理的で説得力のある英語意見文を書かせる。	○		
3	作文テストを受ける。	ルーブリック評価を行う。		○	○

(5) どのように学ぶか(学習過程・指導)の工夫

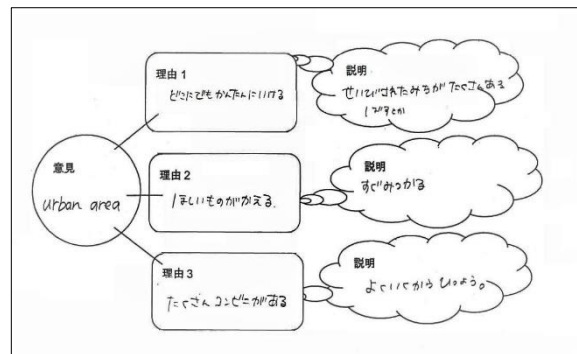
対話を通して考えを深めた後、論拠を持ってパラグラフを書き、英語意見文を作成する学習過程である。生徒が対話を行う前に、授業者とALTが、テーマについての対話をデモンストレーションし、生徒がどのように取り組みればよいかのイメージを与えていた。なお、本時の目標の確認以外は、全て英語で行っている。

授業者は、英語でのコミュニケーションのうち、特に対話においては、話し手だけでなく、聞き手も重要な役割を果たしていることに着目した。

話し手が根拠を持って自分の主張を論理立てて話すための指導と併せて、聞き手が良い聞き手となるための指導も重視した。

具体的には、聞き手がただ聞くだけではなく、ワークシートに話し手の主張と論拠を図式化させるようにした(第3図)。その際、話し手の主張について詳しく質問させるようにし、話し手に、主張や論拠について更に思考を促すようにした。

このような対話を通して、生徒が意見の形成や再構築をし、論理的で説得力のある英語意見文を書くことができる力を身に付けさせることを目指した。



第3図 聞いた情報を図式化する

なお、返却された作文の校正や作文テストまでの学習を家庭学習で取り組ませることにより、授業時間内で対話をする時間を確保した。

(6) 何ができるようになるか(資質・能力の育成)の検証

比較することを通して、相違点や類似点を検証し、自分の主張と論拠を挙げるができる力については、授業後のアンケートの「ペアで対話をし、都会と田舎の良い点について、自分の意見とその理由を整理することができた」の問いへの回答が、4件法で当てはまるが46.2%、やや当てはまるが53.8%であったことから、身に付けさせることができたといえる。

対話を通して自分の主張を相手に説明することや、積極的な良い聞き手となるために質問したり、図式化して主張や根拠を整理したりする力については、ペアワークの取組の観察、ワークシートの記述から見取ることができた。対話を通し、相手から質問されることで、自分自身の主張が整理され、更に論理的で説得力のある英語意見文の構想を練ることにつながった。また、相手の主張を図式化することにより、相手の意見を整理することができ、質問をする際に有効であった。

自分の主張と論拠を定型表現に当てはめ、英語意見文の構想を練る手法を獲得し、繰り返し活用することができる力は、「深い学び」の具体的な内容として示された「知識を相互に関連付けてより深く理解」(中央教育審議会 2016 p.50)することとつながると考えられる。この「知識」は、今回の単元だけでなく、他の単元の学習の積み重ねで培った、パラグラフを書くことについての「知識」である。英語意見文の提出課題の記述の分析から、自分の考えを英語で形成・整理・再構築する力が育まれたと判断できた。

○生徒の記述から(抜粋)

【対話において気を付けたこと】

- ゆっくり話して、伝えたいことが伝わるように意識した。意見交換して共有することで、考えが深まった。
- ペアの人の意見を尊重した上で、自分の意見を伝えることに気を付けた。
- 相手の共通意見と相違の意見があることを、考えた上で話し合った。

【対話による学習についての感想】

- ・ペアワークをすると楽しく覚えられるし、意外と見直すときも記憶に残っていたりする。
- ・ペアで話しながら行う授業によって、自分の意見が深まったり、新しい発見ができたりして良かった。

【学んだ事を、将来どのようにいかすことができるか】

- ・日本語で考えたことを、英語で表現できるようにすることは、将来、外国人と意見交換するときや説明をするときに、表現を知っているという点で役に立つ。
- ・人の意見を聞いて、自分の意見と違ったり、同じところを見つけられたりするようになった。自分の意見を明確な理由を付けて話すことは、発表するときに使えらなと思った。

研究のまとめ

1 研究の成果

平成 28 年度の研究の成果の「『深い学び』をイメージし、授業を構想したところ『主体的な学び』と『対話的な学び』が取り入れられた」という点については、平成 29 年度の実践においても同様の結果であった。平成 29 年度の研究の成果を次にまとめる。

(1) 「深い学び」へ導く単元計画

深い学びの実現が求められるのは、子どもたちに求められる資質・能力を、授業を通して確実に身に付けさせるためである。

協力員は、単元で身に付けさせたい力を明確にし、その力を身に付けさせるために、単元のどの時間で、何をどのように学ぶことが深い学びになるのかという視点で単元の学習内容と学習活動を検討し、単元の授業計画を授業の目標と共に構想し、授業を行った。

その際、協力員が共通して授業の冒頭に行っていたのが、本時の目標を生徒に提示し、生徒に学習の見通しを持たせることであった。

このことは、単元で身に付けさせたい力を付けさせるために、本時がどのような位置付けにあるかを、生徒と共有することでもある。単元で身に付けさせたい力が明確になると、その実現に向けて、各時間における学習が、単元の中でどのような意味を持つかという視点で、授業づくりを考えることにつながる。

評価についても、単元で身に付けさせたい力を明確にし、その力を身に付けている具体的な生徒の姿を、観点別に評価規準として設定する。そして、単元の学習の中で、いつ、どのようにして生徒の取組を評価するかを、授業構想の段階で計画しておく必要がある。

本研究の授業実践においては、学習活動で作成した作品やワークシートの記述、ペアワークへの取組状況等を、各観点の評価規準に即して、単元の学習の中で、

適切に評価していた。

「深い学び」の実現には、「深い学び」へと導く単元計画が重要である。

(2) 各教科等の「見方・考え方」

協力員は授業を構想するに当たり、「深い学び」の実現に向けて「見方・考え方」を働かせるということをどのように捉えるかについて苦心しているように見えた。

「答申」は「見方・考え方」について「各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方」「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすもの」(中央教育審議会 2016 pp. 33-34)としている。難しく捉える必要はなく、各教科等を学ぶ意義に立ち戻り、その単元で何をどのように学ぶかを考えるヒントとして捉え、授業実践を考えてもらった。

授業実践 1 では、住生活の単元において、健康・快適・安全の視点で、より良い生活を営む工夫について考えさせた。授業実践 2 では、読んだ英文の内容を基にペアワークを通して考えを形成し、英語で表現させた。授業実践 3 では、比較することで考えを形成し、対話を通して再構築した考えを英語意見文に書かせた。

協力員によるこれらの実践を、「見方・考え方」を働かせた「深い学び」の一例として、既に示したところである。

(3) 「主体的・対話的で深い学び」の授業実践の工夫

「見方・考え方」を働かせる「深い学び」を意識した単元計画に基づいて、生徒自らが「主体的・対話的に学習活動に取り組むことにより、学びの深まりに可能性が広がる。平成 29 年度の授業実践で、効果のあった指導上の工夫を、次の三点にまとめる。

ア タイムマネジメント

今回の授業実践では、3 事例ともペアワークを取り入れていた。ペア・グループワークを行う時間を適切に設定することが大切である。話合いの活動だけでなく、個人で考えを深めることについても同じことがいえる。

実践では、家庭学習(宿題)を取り入れて、授業中の話合いや考えを深めるための時間を確保した。また、それだけでなく、事前に学習したことを授業で活用させる工夫が見られた。

さらに、ペアワークをさせて授業を終わるのではなく、結果や成果等を発表し、他者の意見を聞いて気付いたことを共有させたり、振り返りをさせたりする時間を設定することで、生徒は考えを更に深めることができていた。

時間の管理についても意識することが大切である。実践では、〇時〇分まで〇〇を行うと板書することや、大きなタイマーを用いてカウントダウンすることで、決められた時間で活動を行うために、生徒が集中して取り組む姿が見られた。

イ 生徒の気付きや思考を促す

実践では、生徒からの質問等にすぐに答えを教えるのではなく、ヒントを与えたり、既存の知識に気付かせたりしていた。また、知識を活用して考えを深める場面では、生徒に任せて活動を見守っていた。

このことにより、生徒は自分たちの力で考え、主体的に学習に取り組むことができていた。

ウ 的確な指示をする

個人ワークにしても、ペア・グループワークにしても、今は何をすべきなのかが分からないと、生徒は主体的に取り組みにくい。どの実践においても、学習活動をさせる際に、生徒が何をどのように取り組むかについて、的確に伝えていた。また、その先の学習展開についても予告し、生徒に見通しを持たせていた。

口頭の指示だけでなく、板書等で可視化すると更に効果的である。また、デモンストレーションにより、実際の活動を行って見せることも効果的であった。

2 今後の展望

(1) カリキュラム・マネジメント

資質・能力の育成や「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、カリキュラム・マネジメントの視点が重要である。

12月の第四回協力員会では、カリキュラム・マネジメントが話題になった。「答申」には、教育課程の編成について、教科等横断的な視点で取り組むことが示されているが、助言者から、その実現のために「単元配列表」の活用が有効だという提案があった。この「単元配列表」とは、縦軸に各教科等、横軸に4月から3月までの時間軸を置き、各教科の単元計画を一枚の紙にまとめたものを指す。協議の中で、自分の担当教科の学習内容を他教科と共有することからカリキュラム・マネジメントに取り組むという意見に対して、それは、教科の学習内容を中心とした考えであるという助言者の指摘があった。教科の学習内容ではなく、生徒の資質・能力を中心にして、カリキュラム・マネジメントを考える必要がある。すなわち、学校目標やグランドデザインの下、どのような資質・能力を身に付けた生徒を育むのかを中心に置いて、その資質・能力を身に付けるために各教科等でどのように学ぶかを、教科等横断的な視点で考えていくということである。

さらに、地域社会にもカリキュラム・マネジメントの取組に関わってもらえることができれば、「社会に開かれた教育課程」の実現につながる。平成31年度には、神奈川県立全県立高等学校等で、コミュニティ・スクールが導入される。学校と地域の連携・協働体制の一層の充実に向けて動向を注視したい。

また、協力員会では、学校内で教科を越えてチームを作るなどの、組織的な授業改善の取組の必要性についても話題になった。各学校においてカリキュラム・

マネジメントについて共通理解を図った上で、組織的に取り組むことが、今後ますます重要になるだろう。

(2) 授業実践事例集の作成

二年間の研究で、六つの授業実践例の収集・分析を行った。これらを基に、実践事例集をまとめ、研究成果物とした。「主体的・対話的で深い学び」の授業改善の実現に向けたヒントとして、各学校で御活用いただけると幸いである。

おわりに

組織的な授業改善が求められているが、全ては目の前にいる生徒のためである。育成を目指す資質・能力は高等学校在学中だけでなく、生涯にわたり必要なものとなる。生徒たちが十年後、二十年後、どのような人生を歩んでいくのか、高等学校での学びが、人生の糧となり、未来を生き抜く資質・能力が育成されるよう、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善を目指していきたい。

最後に、本研究に二年間、助言者として御指導くださった、國學院大學田村学教授を始め、授業実践に意欲的に取り組んでくださった協力員と、調査研究協力校の皆様から感謝を申し上げ、結びとしたい。

[調査研究協力員]

松陽高等学校 教諭 大石智子
七里ガ浜高等学校 教諭 肥後麗子
麻溝台高等学校 教諭 弓削恵

[助言者]

國學院大學 教授 田村学

引用文献

- 中央教育審議会 2016「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (2018年1月取得)
- 中央教育審議会 2016「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)別紙」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/12/27/1380902_2.pdf (2018年1月取得)

参考文献

- 新教育課程実践研究会 2017『よくわかる 中教審「学習指導要領」答申のポイント』教育開発研究所
大杉昭英 2017『中央教育審議会答申 全文と読み解き解説』明治図書出版